

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 黒須 亜希子

論 文 題 目

出土木製品からみた原始集落の生業と生活

論文審査担当者

主査	名古屋大学准教授	梶原 義実
委員	名古屋大学教授	山本 直人
委員	名古屋大学教授	古尾谷 知浩
委員	京都大学名誉教授	上原 真人

論文審査の結果の要旨

【本論文の概要】

本論文は、出土木製品の検討を通じて、弥生時代・古墳時代を中心とした原始集落の生業と生活について考察を行ったものである。本論文の概要は以下のとおりである。

第1章「稲作と木製農耕具」は、主に耕作具として使用される鋤鍬類について論じたものである。第1節「近畿における直柄鍬の展開」では、近畿地方出土の鍬について編年案を提示し、広鍬と狭鍬のセット関係からその相関性に言及した。その上で、狭鍬の特徴とその製作工程について考察した。第2節「広鍬Ⅰ式の成立」では、直柄鍬の一種である「広鍬Ⅰ式」について、共伴土器の年代から成立地域を特定し、伝播経路や変遷について明示した。第3節「泥除の再検討」では、広鍬の補助装置である泥除について、装着装置の形態から再分類し、各地の出土例を整理することにより、その組合せをパターン化した。また遺物の実見観察から具体的な装着方法の復元を試み、これが湿田においてどう作用したのかをあきらかにした。第4節「西日本における鋤鍬類の組成」では、西日本全域における鋤鍬類の出土例について、機種名称を整理し、地域ごとの出土例を示した上で、その関係性について考究した。

第2章「木製調理具の展開」は、杓子・匙類について、土器や遺構との関係性に言及し論じたものである。第1節「調理具の変遷」では、杓子と匙について検討を加え、これらがすべて調理具に分類されることを示すとともに、主に近畿における出土例の分類および編年をおこない、その特徴を明示した。第2節「容器と調理具の相関」では、前節に示した木製調理具の消長と、調理具の受具である容器との組み合わせについて考察し、このうち縦杓子が、集落内の水を汲む道具であったことを見出した。

第3章「布生産と木製紡織具」は、紡織具の変遷の具体相を探ったものである。第1節「織機の構造と復原ー出土紡織具研究のための基礎作業ー」では、現存する民族具及び民具織機における使用痕跡と出土紡織具のそれとを照合することで、弥生・古墳時代の紡織具の形状についてあきらかにした。第2節「織機の導入と展開」では、各種の織機が導入された時期とその様相をあきらかにするとともに、もっとも出土例が多い無機台機（原始機）の組合せ式布巻具を用いて、その導入と定着について考察した。第3節「紡織具からみた布生産の変革」では、出土織機部材と紡具の編年から、その導入と伝播についてあきらかにした。

第4章「集落の生活と木質資源」は、木製品の用材獲得について論じたものである。第1節「用材選択と木製品生産」では、近畿各府県のデータベースを比較しつつ、用材選択における広葉樹と針葉樹の使用頻度の変化の契機について考察した。第2節「木製品の再利用」では、木製品の用材が新材だけではなく、木製品を再利用したものが一定数含まれることをあきらかにし、その製作から消滅までの過程を復元した。

以上の論を踏まえつつ、終章「生業・生活の変化と木製品」では、弥生・古墳時代における出土木製品の変革要因を生業・生活と関わらせ考察し、本論文の総括とした。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

本論文で分析対象とする木製品は、考古資料の中でも遺存状況や保管状態から、その取扱いが非常に難しい遺物であり、それらを対象に、申請者が埋蔵文化財行政職員として勤務する近畿地方を中心としつつも、全国各地の多くの資料を集成し考察をおこなっていることは、たいへん重要な研究であると評価できる

本論文の特徴は、これまでの木製品研究が、その形態を比較し、年代の変遷や地域間関係をあきらかにすることが主眼であったことに対し、あくまで遺構とのかかわりに基づいた生活環境との対応関係を重視し、その機能的な面についてあきらかにしようとしたことである。

とくに、第1章第3節「泥除の再検討」では、特定の広鋏と「泥除」との対応関係を示したうえで、その装着形態の分析から、両者を強固に結合し、「泥除」の折損を防ぐように変遷するという、道具としての改良・改善の方向性が論理的に示されている。さらに、鋏先と「泥除」の角度が鋭角に変遷することをあきらかにするとともに、それが代掻き具としての「泥除」の機能強化を示すものであることを論じた。「泥除」については、民具の類似例からこれまで、耕作者に泥が飛ぶのを防ぐ泥除としての機能が想定されており、そのことから「泥除」の名称が付されていたが、それらの先行研究に機能面からの再検討を迫る、たいへん画期的な見解である。なお本研究は学会でも高く評価されており、本節の初出論文は著名な学会の論文賞を受賞している。

また、第2章「木製調理具の展開」では、これまであまり注目されてこなかった木製杓子・匙について分析し、とくに縦杓子の機能について、土器との関係やその使用痕などから、水汲み具としての機能をあきらかにしたことは、今後の杓子・匙類の機能論的研究に大いに資することになる。第3章「布生産と木製紡織具」についても、とくに原始機と地機・高機の相互的影響関係を指摘した点は、申請者独自の着眼点として高く評価できる。

本論文にも問題がないわけではない。各論としては優れた部分を多くもつ本論文であるが、膨大な鋏鋤類を含めた木製品を総体的に、環境や遺構との関係性から人々の「生活」を説得的にあきらかにするには、まだ道半ばと言わざるを得ない。また、木製品に関する用語の選択に十分に意識が行き届いておらず厳密性に問題がある点、古環境や植生に関する最新の研究動向が参照されていなかったり、文献史学の研究整理や課題との齟齬が生じているなど、隣接諸分野への目配りが充分でない点などがあげられる。しかしながらこれらの点は、申請者が今後の研究において乗り越えていくべき課題といえよう。

以上により審査委員一同、本論文を博士（歴史学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。